

ゼミ教育の実践的手法に関する一考察

青木圭介

1. はじめに

近年、大学教育に対する社会の見方が大きく変わりつつある。大学では社会で役立つ教育を行っているのかという指摘もその一つであろう。社会で役立つ教育とは何か。その一つの答えが、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」を身に着ける、すなわち経済産業省の提唱する「社会人基礎力」を備えた人材の育成だと言える。社会人基礎力の養成に有効であると実施されているのが、アクティブラーニングの中心的手法とされるPBL (Project/Problem-based Learning)、「プロジェクト体験型学習」や「問題解決型学習」と呼ばれるものである。

PBLとは少人数グループによる課題解決型の学習スタイルであり、学習の主体は学生で、教員はその学習をサポートすることが基本となる。プロジェクトと呼ばれる課題(シナリオ)は、学生自身で見つけるケースもあるが、教員もしくは大学によって予め決められたプロジェクトを提供するケースが多い。池西(2009)はPBLの成否に影響する重要な2つの要素の内の1つが「課題(シナリオ)」であると指摘し、時本(2009)もPBL導入における準備および実践での工夫について、「学生の興味を刺激し学習意欲を高め、広めていくためには教材となるシナリオの工夫が重要である」と述べている¹⁾。したがって、何よりも学生の興味を引く課題(シナリオ)を提供することが教育効果を高める重要な要因となる。

本稿の目的は、社会人基礎力をはじめ、学生にとって社会で必要となる

知識と資質を備えるための教育を如何にして提供するか、その目的や手法、効果について検討することである。本稿で紹介する筆者のゼミが行っているイベントはすべてPBLという課題(シナリオ)に相当する。学生にとって興味を刺激する適切な課題を提供することで、学生が主体となる体験型学習による成果、ゼミの役割やゼミ教育の効果について考えていきたい。

以下、第2章では筆者が考えるゼミ教育の目的について指摘し、第3章ではゼミ教育の実践的な手法を具体的な事例に基づき紹介し、その成果について考察する。第4章はむすびである。

2. ゼミ教育の目的

多くの大学では語学やゼミと呼ばれる授業は、他の講義形式の授業と比べると比較的少人数で実施されている。少人数であればそれだけ教員の学生への指導も行き届きやすくなる。その特性を生かして学生と教員とが双方向に意思の疎通を交わしながら、様々な課題やテーマを設定することで教育効果を生み出そうとするのがゼミである。近年注目されている教育手法であるPBLはゼミ教育においてとくに有効的に活用できる。PBLの特徴には次のような項目が挙げられる²。

- ・学生は数人からなるグループを作り、学習に取り組む
- ・課題に対して予備知識に関わらず取り組むべき方法や事例が示される
- ・グループで問題を解決するための学習計画を立てる
- ・授業時間外に個人で自己学習を進め、その成果をグループで共有する
- ・学習に必要な文献や資料も自分で適切なものを選択し、それらもグルー

¹ PBLに基づく学習方法については多くの分野で活用されているが、下鳥(2014)は観光ホスピタリティ教育におけるPBLの可能性を分析、少人数教育のゼミで様々なプロジェクト(課題)によるPBLの教育効果についての研究は大いに参考になる。

² 以下の項目は三重大学高等教育創造開発センターの「PBLのススメ」を一部参考にしてゐる。http://www.hedc.mie-u.ac.jp/pdf/student_guide.pdf#search=pb1%E3%81%A8%E3%81%AF

プで共有する

以下では、筆者がこれまで行ってきたPBLを活用したゼミ教育の経験に基づき、ゼミ教育を通じて学生に獲得して欲しいもの、ゼミ教育の目的について考える。

(1) 目的意識を有した学生生活の実現

大学には様々な地域から多様な学生が集まる。1年次に部活やサークルに所属することにより、また、授業面では比較的少人数クラスである初年次ゼミや語学のクラスなどを通じて、知人や友人を作り、それが学生生活の幅を広げる第一歩になることが多い。4年間の学生生活の中で、入学当初から知り合った者同士が卒業まで共に机を並べ勉強に勤しみ、部活やサークル活動で共に汗を流しつつ学生生活を謳歌することもあるが、中には途中で目標を見失い、大学に通うことの意義や勉強への興味、意欲も失い、学生生活のクオリティーの低下を招いてしまう学生もいる。さまざまな境遇の学生に対して、よりクオリティーの高い学生生活を実現する一つのきっかけとして「ゼミ」を考えたい。

本学では専門演習と呼ばれるゼミは大学3年次からスタートするが、大学生活のちょうど折り返し地点で改めてそれまでの学生生活を振り返り、やがて迫りつつある就職活動への準備を進めていかななくてはとの認識が芽生え始めたとき、新しく始まるゼミが学生生活のクオリティーを高める大きなチャンスになるかもしれないと気付く。一般的にゼミではこれまで知り合うことのなかった新しい仲間が集い、与えられた課題を共に実践していくことを通じて共通の目的意識を持つことになる。その目的とはゼミでの発表であり、ゼミ独自のイベントへの参加であり、最終的には卒業論文の作成ということになる。いずれにせよ、与えられた課題や卒業論文のテーマが各々異なっていようとも、それらを一人一人の学生がゼミの枠組みの中で進めていくことが共通の目的意識を有することになり、その課題に真摯に取り組むことで学生生活に活力が生まれることになる。

そのようにして共に勉学に勤しむゼミの仲間とは、自然と連帯感や協調性が培われ、学生生活の中でもゼミが中心的な位置づけとなることも少なくない。ゼミで知り合った仲間とは卒業後も末永く親交を深めることも多い。

(2) コミュニケーション能力の向上

ゼミでは各々が与えられた課題に対し準備をし、その成果を発表・報告することになる。人前で発表することが苦手とする学生は多くいるが、ゼミはそのような学生が発表の機会を重ねることで苦手意識を無くす場である。与えられた課題に対し十分な準備をすることが人前で話すことへの自信につながり、その自信が恥ずかしさや緊張感、不安を取り除いてくれる。緊張感や不安が無くなれば、次は如何に分かり易く人に伝えることができるかということを考えるようになり、プレゼンテーションの技術が磨かれていく。さらに、自分の発表に対する質問に答えるなど、質疑応答を重ねることで人とのコミュニケーション能力を高めることにもなる。

また、ゼミでは他のゼミ生達との共同作業を伴うイベントも多々ある。詳細については後述するが、そのような共同作業を通じて、協調性や主体性、実行力や発信力といった社会人として必要されるスキル³を身に着けることができ、それらもすべてコミュニケーション能力の向上に結び付くものである。

(3) 社会人基礎力の育成

社会人基礎力とは、「職場や社会の中で多様な人々と共に仕事をしていくために必要な基礎的な力」で、経済産業省によって2006年から提唱されている。それらは3つの基本的なカテゴリーの中に12の能力要素を配置することで構成されている。(図-1)を参照。

³ これらのスキルは基本的には「社会人基礎力」に含まれるものである。

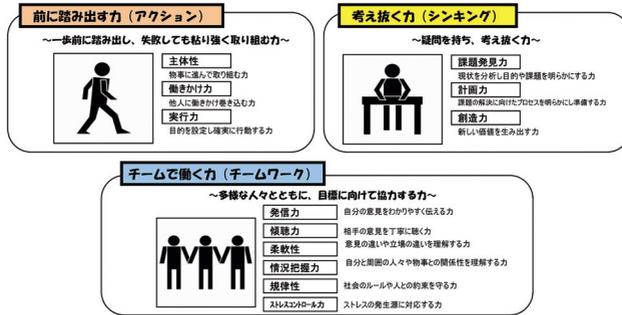
図-1 社会人基礎力とは

「社会人基礎力」とは



▶ 平成18年2月、経済産業省では産学の有識者による委員会(座長・諏訪康雄法政大学大学院教授)にて「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を下記3つの能力(12の能力要素)から成る「社会人基礎力」として定義づけ。

<3つの能力/12の能力要素>



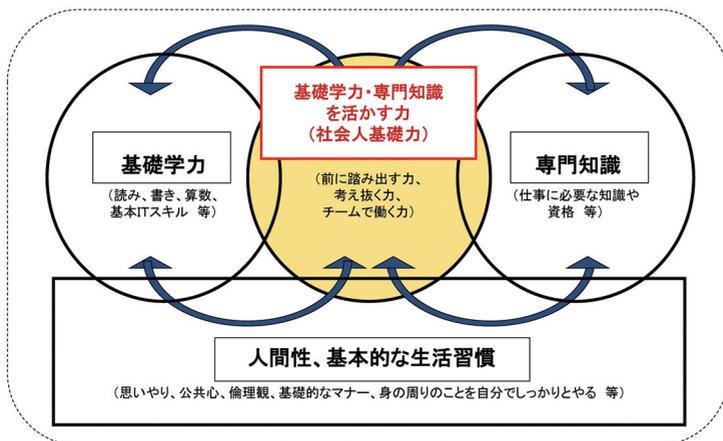
出所：経済産業省

- 〈前に踏み出す力〉……………「主体性」「働きかけ力」「実行力」
- 〈考え抜く力〉……………「課題発見力」「計画力」「創造力」
- 〈チームで働く力〉……………「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」
「規律性」「ストレスコントロール力」

経済産業省によると、企業や若者を取り巻く環境の変化により、「基礎学力」「専門知識」に加え、それらをうまく活用していくための「社会人基礎力」を意識的に育成していくことが今まで以上に重要となってきたとの認識から、大学教育における「社会人基礎力」の育成を強く推奨している。経済産業省では2013年には社会人基礎力育成の好事例の普及に関する調査を行い、「社会人基礎力を育成する授業30選」実践事例集を発表し、広くその普及に努めている⁴。

⁴ 詳細については経済産業省のサイトを参照。
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>

図-2 能力の全体像
＜能力の全体像＞



出所：経済産業省

図-2にあるように、社会人基礎力の育成には「基礎学力」や「専門知識」を活かす力も必要となるが、読み書き・計算・ITスキルなどの「基礎学力」や仕事に必要な知識・技能などの「専門知識」についても一部はゼミ教育を通じて養うことを目的としている。

(4) 満足のいく就職活動

4年間の修業年数を経た学生の多くは卒業後社会人として社会に飛び立っていく。学生にとっては卒業後の自分の進路は大変重要で、4年生になると多くの学生が少なからず不安と共に就職活動を始めることになる。

就職活動においては、企業に対して如何に自分をアピールするかが大事になるが、企業から見れば就職後にどれだけ会社に貢献してくれるか、その期待値が高い学生を採用することは当然である。その期待値と密接な関係があるのが前項で指摘した「社会人基礎力」である。学生がゼミの活動で培った「社会人基礎力」を武器に満足のいく就職活動を行うことが、ゼミ教育が提供する重要な目的である。

日頃からゼミにおいて社会で働くことの意義や重要性などを学生に伝えているが、ゼミは最終的に学生が自ら満足できる就職先を見つけることをサポートする場でもある。筆者のゼミでは就職活動を各々が個人的に独力で行うものとは考えていない。もちろん、希望する就職先を確保するために学生個人が独自にしかるべき行動をとることは当然であるが、ご家族の方々が学生本人を物心両面からサポートするように、ゼミでもせめて「心」の面からだけでもサポートすることが大事と考えている。就職活動のスタート時期はほぼ同じであるが、就職活動の終了時期には内定の取得時期によって個人差がある。早々に内定先を確保する者もいれば、年を跨いでようやく確保する者もある。就職先から内定をもらう時期の早い遅いは本来は重要な問題ではなく、大事なのは如何に自分に合った、自分が満足に行く就職先を見つけるかであるが、内定がなかなかもらえず、周りから一人取り残されたような状況に置かれた学生の心中は決して穏やかでないことは容易に想像できる。そのようなときにゼミの仲間からのサポートは大変心強いものとなる。常々学生に伝えていることは、就職活動を通じて得られるものは就職先だけではなく、いい意味でも悪い意味でも人の人間性や器の大きさを垣間見ることになる。そのような経験と共に就職活動は自分を人としてさらに成長させるチャンスでもあると。

(5) 早期離職の防止

近年、社会で大きな問題として提起されているのが若年者の早期離職問題である。日本経済研究センターの報告(2011)⁵によると、3年以内の早期離職率は3割に達し、そのことが学生、企業双方に多大なコストになっているということである。当該報告書によると、「問題の所在は、就業に関する認識ギャップが、「就職後」に顕在化することにある。学生側は多

⁵ JCER 経済100葉箱2011年度番外編⑥を参照。http://www.jcer.or.jp/report/econ100/pdf/econ100bangai20110715.pdf#search=%E6%97%A9%E6%9C%9F%E9%9B%A2%E8%81%B7%E5%95%8F%E9%A1%8C

くの知識を有しないまま企業選択を行い、企業側もとことん内情を伝えることなく、潜在的な能力の高い学生の確保を優先する。こうした結果、新入社員は内定以降に自ら思い描いていた業務に従事できないケースが少なくなく、就職ギャップ発生の一因となっている。」というものである。この報告書は解決策として、「学生と企業の双方のギャップを解消するために「就業教育の推進⁶⁾」と「複線型新卒採用制度の導入⁷⁾」を掲げているが、実効性を挙げることは容易ではない」と指摘している。

確かに、この問題を解決することは容易ではないかもしれないが、とくに前者の「修業教育の推進」はゼミ教育の一環として提供することは可能である。また、学生のコミュニケーション能力の欠如に因るところも大きく、日頃から会社の先輩や上司との間で円滑なコミュニケーションが取られていれば、このようなギャップが表面化する前に解決の糸口を見つけることができるかもしれない。ゼミ教育の目標として掲げるコミュニケーション能力の向上は、学生の卒業後の早期離職を回避する一助になるものと考えている。

3. ゼミ教育の実践的手法

本章では、筆者がゼミで実施している内容やイベントについて紹介する。それらはPBLでの課題（シナリオ）に相当するものである。ゼミによっては人数の関係で同様の取り組みが困難な場合も想定されるが、経験上およそ8名程度のゼミであれば概ね実施可能と考えている。むしろ、ゼミ生が仮に30名を超えるような場合においてはフリーライダーの問題⁸⁾が懸

⁶⁾ 社会・企業を知らない学生に対し、就業意識の向上を目的として、就業教育の推進を強化すること。

⁷⁾ 早期離職をすると、正社員での再就職が難しいという日本の労働市場の特徴を踏まえ、解雇規制の緩い契約社員としての採用を義務付けるなど、4項目からなる指針を示している。

⁸⁾ 経済学では対価を支払うことなしに便益を得ることを指すが、ここではゼミで与えられた課題等について自ら取り組むことなく他のゼミ生に依存するなど、勉学上の負担を免れたまま様々なゼミ行事に参加することを想定している。

念され、また、少人数教育の範疇からも逸脱していることから、期待した効果を得ることは難しいように思える。当ゼミの学生数は毎年約15名前後で推移しており、以下で紹介する取り組みもすべて15名前後で実施している。

ゼミの運営はゼミ生を募集する際の説明会から始まっている。当ゼミでは年間を通じて様々なゼミ行事（イベント）が予定されている。PBLの見地からはこのゼミ行事が課題（シナリオ）であり、学生に興味のある課題を提供することを意味している。もちろん、それらの行事に参加するためには費用が掛かる場合もある。東京や大阪などで実施される際は交通費や宿泊代等、相応の負担は避けることができない。したがって、ゼミの説明会においては実施予定のゼミ行事をすべて丁寧に説明し、掛かる費用負担についても説明することは不可欠である。予め実施時期も含めて説明することで、学生は計画的にアルバイト等の予定を立てることができる。学生にとって重要なのは、その費用に見合う便益を得られるかどうかであり、一連のゼミ行事を実施することによってどのような効果が得られるかをしっかりと説明することが大事である。説明会において予めゼミ行事について説明しておく、その行事に参加することを目的にゼミを志望する学生、すなわち課題（シナリオ）の実施に興味があるものが集まり、その後のゼミ運営もスムーズに行うことができる。

(1) 日頃のゼミの取り組み

これは大学の他のゼミとも概ね共通しているかと思われるが、当ゼミでは主に3年次前半を中心に実施している。教員の専門分野に関連する文献について、各自報告する箇所を指定し、輪読する形式である。予め決められた順番によって回ってくる報告者は、担当部分について書かれてあることを他のゼミ生の前で報告する。その際は報告に沿ったレジュメとプレゼン用のパワーポイントを準備することを課している。輪読する文献は、学生の知識レベルとその進捗状況に合わせて教員が選択し、基本的には基礎

的な文献からスタートし、順次より専門的な文献へと読み進めていき、夏休みに実施されるゼミ合宿の際には、本格的な専門書について報告することになる。

筆者が初回のゼミで必ず学生に伝えることがある。以下ではそのいくつかを紹介する。

- ① 自分の報告の際には、「とうとう報告が回ってきた……」、「順番でせざるを得ないから……」というような消極的で後ろ向きな捉え方をしないこと。教員を含め他の学生もわざわざ自らの時間を割いて自分の報告を聞いてもっているという意識をもって報告して欲しい。そのように考えることで自分の報告を相手に出来るだけ分かり易くしようという気持ちや、時間を割いてもらっているのに下手な報告は出来ないという気持ちが芽生えることになる。
- ② 自分の報告は、自分の技量を試す最良の機会である。しっかりと事前準備がなされた報告には自ずとその跡が伺えるもので、それは必ず他の学生にも伝わる。時に自分の報告が手本となり、時に人の報告には負けたくないという気持ちも湧いてくる。それがゼミ生同士の切磋琢磨に繋がる。
- ③ 基本的にテキストを見ずに報告をし、常に他のゼミ生達の顔を見ながら報告をする。報告者がテキストを見たまま下を向いて報告を行うと、聞いている側も下を向くようになる。テキストを見ないで報告するためには、それ相当の準備が必要になる。人に何かを伝えなければ、しっかりとその人の顔を見て話すのが基本であり、そうすることで本人のプレゼン能力も高まる。
- ④ 最後に、報告者以外の人には、報告者を放置しない。報告者に対して良い点、悪い点をしっかりと伝えてあげる。それが人の報告によ

く耳を傾けることになり、自らの評価能力を高めることに繋がる。
それが引いては自分のプレゼン力に反映される。

このように当ゼミではゼミ生に報告に対する一定の姿勢を保ち、各ゼミ生が自分の個々の力を存分に発揮できる環境を作ることを心がけている。十分な事前準備がなされ、人に言いたいことがしっかりと伝わるいい報告に対してはそう評価し、逆に不十分な報告に対してはいわゆるダメ出しをし、やり直しの機会を与える。再度やり直した際の報告が以前より改善していれば、改善した部分を伝え評価する。ゼミの中では人の報告の良い所も悪い所も全員で共有することがゼミの一体感や連帯感の醸成に繋がると考えている。

(2) 課題1：合同ゼミ

夏休みの例年9月に他大学との合同ゼミを実施している。以下、2015年9月に実施された合同ゼミについて紹介する。

〈合同ゼミ参加大学〉

当ゼミの他、神戸学院大学経済学部岡部ゼミ、東洋大学経営学部川崎ゼミ、総勢48名。

〈合同ゼミ開催場所と日程〉

国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区代々木）
2015年9月24～26日

〈合同ゼミ実施内容 1日目〉

午後に国立オリンピック記念青少年総合センターに集合した学生達は、何の事前予告も準備もなく、1チーム4～5名の3ゼミ混成のチームに分けられた。したがって、同じゼミからは多くても2名、全部で11のグルー

プが作られた。その後、教員から政治・経済・社会問題に関するテーマを与えられ、出会ったばかりの他大学の学生とグループでディスカッションを行い、グループごとに今後の日本にとって必要な課題や法案にしたいテーマ等について考え、各グループがそれについて報告を行い、それぞれのグループが決めた自分たちの法案にしたい政策を携え国会に向かった。

国会では議事堂内を見学した後、衆議院第一議員会館に赴き、第一会議場で井坂信彦衆議院議員（当時：維新の党政務調査会長）と面会、そこで自分たちの主張を盛り込んだ政策案を各グループが発表し意見交換を行った。その後、井坂議員と学生達とで活発な議論を交え、日本の将来についてそれぞれが真剣に考える機会を得ることになった。議員から向けられた



グループ分け後のディスカッション





井坂衆議院議員との意見交換



ナイトセッション

学生たちへの熱いメッセージは、学生一人ひとりの心に届いたと思われる。

その後、オリンピックセンターに戻り3ゼミ混成の11チームには、日本を揺るがす3つのテーマ：「原発問題」、「TPP」、「安全保障政策」に分かれて議論する場を設けた。このナイトセッションで学生たちは翌日の最終報告会と次の議員訪問に備え、夜遅くまで議論し、プレゼンテーションの準備を進めていた。

〈合同ゼミ実施内容 2日目〉

昨晩のナイトセッションにおいて、3ゼミ混成の11チームが「原発問題」、

「TPP」、「安全保障政策」に分かれて議論したのにつき、この日の午前中は、「原発問題」4チーム、「TPP」4チーム、「安全保障政策」3チームでプレゼンテーションを作成、最終報告をしてもらった。その中から5チームを学生の投票によって選出し、午後から再び国会を訪れた。

衆議院第一議員会館に菅直元総理大臣を訪ね、午前中の最終報告会で好評だった5チームに菅元首相を前にグループワークの成果をプレゼンテーションしてもらい、学生チームが取り組んだテーマについて菅元首相と議論を重ね、その後、菅元首相から「3.11東日本大震災と原発事故」についての講演を拝聴した。震災当日の首相官邸の様子や福島第一原子力発電所の事故対応など、当時震災対応の最高責任者であった元総理大臣の



各グループによる発表



菅元総理との質疑応答



菅元総理へのグループ発表



菅元総理の講演

生々しい経験について話を聞くことで、学生たちは改めてあの震災の凄まじさと我々が学ぶべき教訓の大きさを感じたことと思われる。

〈合同ゼミ 総評〉

この合同ゼミのメインイベントは、各グループが議論を重ねた末に作り上げたプレゼンを携えて国会議員を訪ね、自分たちの主張を直接聞いてもらい、その場で議論するという大胆な企画であった。見知らぬ同学年の学生が集まり、グループを作り、共同作業を行う。グループ内には1人か2人しか同ゼミ出身者はいないため、フリーライダーになることはできず、

ゼミを代表しているという意識から真剣に取り組まざるを得ない状況であった。

今回の合同ゼミでの工夫は、日頃パソコンやスマートホンに接する機会が多い学生に対し、敢えてスマートホンの使用を制限したことである。基本的には与えられたテーマについて各自が既に持っている知識を出し合い、その後、確認のために10分程度のスマートホンの使用を許可し、その後またそれぞれが議論を進めるという形式を複数回行った。また、学生が利用できるパソコンは準備されていなかったためプレゼンソフトは使えず、スライドの代わりに4枚の画用紙とマジックペンを配布し、各グループがそれぞれ工夫を凝らした手書きのスライドを作成、プレゼンテーションの補助道具とした。教員の狙いは、いずれ学生たちが直面する就職活動でのグループディスカッションに対応できる能力と技術の育成、もちろん、企業との面接においてはスマートホンを使用することはできないため、デジタルデバイスに頼らない議論の構築と発表を試みたものである。

今回、井坂信彦議員や菅直人元総理大臣といった、普段なかなか会うことのできない方々と議論ができたばかりでなく、見知らぬ他大学の学生とチームを作り、限られた短い時間の中で、一つの目標に向かって協力して物事を作り上げたことの達成感はとても大きかったようである。参加者した学生全員にとって大変貴重な経験になったように思われる。

少人数教育を可能にするゼミであるからこそ、フットワークを軽くし、時には大学の教室から抜け出し、いろいろなところに出掛け、様々な人々と議論し交流することで、多くの発見や学びのチャンスを得ることができる。このことが大学のゼミで学ぶ大きな魅力の一つであると再認識できる機会であった。

(3) 課題2：ゼミ合宿

当ゼミでは毎年夏休み期間中にゼミ合宿を実施している。合宿先や日程はゼミ生が決め、合宿地への移動手段から宿の手配まですべてが学生に委

ねられている。自分たちのゼミは自分たちで作りに上げるというのがゼミのモットーである。これまで、大分、熊本、鹿児島、福岡という九州圏内から、遠くは沖縄、神奈川まで足を延ばし実施してきた。

ゼミ合宿は少なくとも2泊3日の日程で組み立てられ、前半は日頃大学の教室で行っているのと同様、指定されたテキストについて各自がレジュメとパソコンを使い発表する。教室内でのゼミでは毎回1～2名の発表を行っているが、合宿では15名全員が各自担当する部分の発表を行い、質疑応答をこなしていく。朝から始めて全員の発表が終わる頃には既に夜も更けていることも多々ある。合宿の後半はゼミの次の大きなイベントである対抗ゼミに向けた進捗状況についての発表である。

詳細については後述するが、対抗ゼミとは毎年12月初旬に開催され、現在では5大学6ゼミで実施される学外ディベート大会である。ディベートのテーマは各大学が希望するテーマを前期の6月頃に持ち寄り、テーマの擦り合わせを行った上で、討論テーマと討論相手を7月初旬に決定する。したがって、ゼミ合宿においては討論テーマに対して、何が論点となり、如何なるところが問題点として議論されるのかということについて、夏休み中に各自が入念に調べることを課題として課し、合宿当日に調べてきた成果を発表してもらうことになっている。ゼミ生たちは複数のテーマについてグループ分けを行い、各自希望するテーマのグループに所属し、自分たちで役割分担をして各々調べてくることになる。

稀に学生や他の先生方からゼミ合宿はある種のリクリエーションのようなイベントと誤解されることがあるが、当ゼミで実施しているゼミ合宿に遊びの要素は全くなく、基本的に朝から晩まで緊張感を持って勉強に励み、活発に議論している。まるで体育会系運動部の合宿のようである。だからこそ、合宿も後半になってくると学生の疲労感もピークに達し、本当に疲労困憊しているように感じるが、最終日の最後の報告が終了したときの達成感是非常に大きく、学生の顔一面に安堵感と自分たちは成し遂げたという自信に満ち溢れた笑顔を見ることになる。

ゼミ合宿を実施することで得られるものは、長時間にわたる集中的な勉強への取り組みによって得られる学力、知識、忍耐力。さらに、充実感、達成感、学生同士の価値観の共有など、計り知れないものがある。すべてのゼミ生が寝食を共にし、課された課題に対しては準備段階から各自が協力しながら研究を進め、議論を重ねていくことから、ゼミ生同士がより強い連帯感と協調性を手に入れ、ゼミとしての結束がひと際強固になる。この結びつきの強さは、日頃の大学で行われるゼミだけでは決して得ることのできない貴重なものだ実感している。このようなゼミ合宿を終え後期タームが始まると、ゼミでは対抗ゼミに向けた準備が本格的に始動することになる。

(4) 課題3：対抗ゼミ

正式には「学外対抗ゼミナール」と呼ばれる他大学の学生とのディベート大会である。この対抗ゼミに現在参加している大学は、長崎大学経済学部須斎ゼミ、関西大学商学部高屋ゼミ、関西大学経済学部土居ゼミ、同志社大学商学部五百旗頭ゼミ、名古屋市立大学経済学部稲垣ゼミと当ゼミの5大学6ゼミである。各ゼミからは最低でも2チームがエントリーされ、毎年約80～100名の学生が参加し、活発な議論が交わされる。ここでは2015年12月に行われた対抗ゼミを事例にその内容について紹介する。

対抗ゼミに向けた最初の準備は3年次前期のゼミにおいて討論テーマを決めるところから始まる。4月のゼミスタート時点で各自が興味のあるテーマを考えておくことを指示し、5月末頃にそれぞれが興味のあるテーマを1～2テーマ出すと、全部で20以上のテーマが集まる。その後、数週間を掛け、最終的に学生が討論をしたいと思うテーマを2つに絞る。

各大学のゼミから希望のテーマが6月末を目途に集計され、それぞれ異なるテーマがないかマッチングを行う。マッチングの結果、それぞれ同じテーマを出したゼミがあれば、それらがそのまま当日の討論相手となる。実際は上手くマッチングするケースもあるが、マッチングしないことも多

い。その場合は、各ゼミから基本的に2つ出されるテーマの内、少なくとも1つは希望のテーマについて討論することが認められ、もう1つのテーマについては他大学のゼミから出されたテーマを受け入れることになっている。当ゼミの場合は3チームがエントリーし、最終的には「TPP参加への是非」、「円高と円安、どちらが日本経済にとって望ましいか」、「日本はカジノ合法化をするべきか否か」の3つのテーマで討論することになった。

7月初旬には討論テーマと討論相手が決まるが、どちらの立場で議論するかは10月頃に各ゼミでの話し合いを通じて決定される。当ゼミでは先述したように夏のゼミ合宿においてテーマについての論点や問題点を議論することから、その議論を通じて自分たちがどちらの立場がいいかを選択し、10月以降に相手チームと相談して決めている。

10月以降の後期のゼミでは、毎回この対抗ゼミについて各チームの進捗状況を報告することになる。夏合宿に向けての課題として、それぞれのテーマのメリット・デメリットを分けて調べることを予め指示することで、合宿当日はメリット班とデメリット班がそれぞれ調べてきたことを報告することになる。この班分けが、後々討論立場が決まった際のオフenseとディフェンスの役割を担うことになる。ゼミでの進捗状況の報告も基本的にこの班単位で行われる。

11月に入ると、討論をするに当たってのストーリー作りが始まる。要はどのような攻め方をするか作戦を練っていくのである。並行して、相手側への質問やこちらに向けられると予想される質問をできるだけ数多く考え、その答えも用意しておく。11月末には各チームでレジユメを作成し、それを相手チームと交換し、相手から受け取ったレジユメについて詳細に分析するという作業を行う。対抗ゼミが近づいてくると、当ゼミ所属の学生たちはほぼ毎日のように図書館や情報処理室に集まり、各自がそれぞれ調べてきたことについての情報交換、レジユメや資料の作成、当日発表用のプレゼン準備などを行っている姿が見られるようになる。もちろん作業は

学外でも続けられ、チームのメンバーがそれぞれの下宿やファミレスに集まり、同様の作業をしていることも多々ある。実は、ゼミの教育効果としてこの学生たちの自主的な集まりが非常に大きいと考えている。夏合宿で培った協調性や結びつきの強さがこの自主的な集まりに活かされ、自主性やリーダーシップなどの各自が持つ個性が磨かれ、主体性、実行力、傾聴力、課題発見力、さらには規律性、発信力、柔軟性、計画力、他すべての社会人基礎力に挙げられる12の能力要素を身に着けることになる。

例年12月の第1週目の週末に開催される対抗ゼミでは、ゼミ生達がそれまで真剣に取り組んできた成果が発揮される。フロアにいる他の多くの学生たちを前にして、各自が調べてきた論点を、自分たちで作りに上げたストーリーに基づき、積極的に論理展開していく。その姿は4月のゼミスタート時点の学生と同じ学生とは思えない、凛々しく、自信に満ち溢れ、眩しいくらいの輝きを放つ。人はこれ程までに成長できるものなのかと本当に実感する。もちろん、ディベートが競技である以上最終的には勝敗がつけられる。この時の戦績は2勝1敗であった。学生たちにとっては勝敗が大変気になるらしく、始まる前から「やるからには勝ちたい」という気持ちが強いようである。しかし、ゼミを指導する教員としては、勝ち負けは大きな問題ではなく、ゼミ教育としての成果は勝ち負け以前に十分上がっているのである。もちろん、当日のディベートの経験は学生にとってはなかなか得ることのできない大変貴重なものである。

周知の通り、ディベートは自らの考えを客観的な資料やデータを用いつつ論理的に、かつ説得的に相手に伝え、自分たちの議論の優位性を相手に理解してもらうことを目指した知的ゲーム(競技)である。ディベートによって得られる効果は以下のようなものが挙げられる⁹。

1. 問題意識を持つようになる。
2. 自分の意見を持つようになる。

⁹ ウィキペディア「ディベート」から引用。

3. 情報を選択し、整理する能力が身に付く。
4. 論理的にものを考えるようになる。
5. 相手（他人）の立場に立って考えることができるようになる。
6. 幅広いものの考え方、見方をするようになる。
7. 他者の発言を注意深く聞くようになる。
8. 話す能力が向上する。
9. 相手の発言にすばやく対応する能力が身に付く。
10. 主体的な行動力が身に付く。
11. 協調性を養うことができる。

対抗ゼミは、学生に対して決して学内だけでは得ることができない、知識と経験、これまで指摘してきた効果をもたらしてくれる。学生のコミュニケーション能力の向上は目を見張るほどであり、少人数教育としてのゼミの教育効果は絶大である。また、学生は他大学の学生たちと接することで、同年代には優秀な学生が他にも沢山いることに気付く。それがその後の就職活動では彼らと同じステージで勝負しなければならないことを認識させ、就職活動への意気込みを高めることにも繋がる。

当ゼミでは上記に述べたような3つの課題（イベント）を提供し、少人数教育としてのゼミの教育効果を高める試みを行っている。これらのイベ



ディベートの様子①



ディバートの様子②



参加者集合写真

ントの成功の可否は、学生たちが自らの考えで実行しようという意思を持ち、行動し、協力しながら進めていくことに尽きる。教員は共通の目的をもった学生たちが皆同じ方向を向き続けるサポートをするだけである。

4. おわりに

本稿では、少人数教育としてのゼミ教育について、PBLに基づく実践的手法を用いた教育効果について考察してきた。社会のニーズに合った学生への教育、人材育成はこれからも大学教育における重要な課題である。どのような人材教育を提供するかに当たり、「社会人基礎力」と「コミュ

ニケーション能力」の習得を重要な目的と考え、ゼミ教育の具体的な実践的手法を紹介してきた。

ゼミで設定された課題（シナリオ）に対し、学生が主体となって学習に取り組んでいくことで、知識と知見、そして経験を積むことができる。それらを材料として、自らが学生時代に成し遂げてきたことをストーリー化し、それをを用いて就職活動をはじめ、今後の社会生活に活かしていく。

ゼミ教育には多くの可能性を秘めている。学生生活をより有意義で豊かなものにするのはもとより、社会人として必要な個人の資質を習得することができる。ときにはゼミで培った人的ネットワークの活用により、仕事や社会生活をより充実したものにできるかもしれない。ゼミ教育は、工夫次第でまだまだ多くの教育効果を生み出すことができると考えられる。そのための更なるイベントや手法の開拓は今後の重要な課題である。

大学から輩出された卒業生たちが、大学で得た教育の成果を携え、それぞれの社会で活躍し、社会貢献を果たすことになれば、大学も社会に対してその職責を果たすことになる。大学教育において人材教育の要となるのはゼミ教育であり、その重要性は計り知れない程大きいと思われる。

参考文献

- 池西静江 (2009) 「PBL テacher養成の実際 テacherズガイド作成を中心に」, 『看護教育』, 50 (12), 1072-1077ページ。
- 河合塾編 (2011) 『アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか—経済系・工学系の全国大学調査からみえてきたこと』, 東信堂。
- 河合塾編 (2013) 『「深い学び」につながるアクティブラーニング全国大学の学科調査報告とカリキュラム設計の課題—』, 東信堂。
- 経済産業省 (2010) 『社会人基礎力 育成の手引き—日本の将来を託す若者を育てるために』, 河合塾。
- 経済産業省 (2014) 『「社会人基礎力を育成する授業30選」実践事例集』。
- 下島康史 (2014) 『観光ホスピタリティ教育における PBL の可能性』, くんぶる。
- 時本圭子 (2009) 「PBL 教育を導入した成果と展望 倉敷中央看護専門学校の実践」, 『看護教育』, 50 (12), 1082-1086ページ。
- 三重大学(2008)『PBL のススメ』, 三重大学高等教育創造開発センター, <http://www.hedc.mie>

-u.ac.jp/pdf/student_guide.pdf#search='pbl%E3%81%A8%E3%81%AF'

山田和人（2009a）「同志社大学のPBL プロジェクト学習とポートフォリオ（1）」、『文部科学教育通信』，227，24-26ページ。

山田和人（2009b）「同志社大学のPBL プロジェクト学習とポートフォリオ（2）」、『文部科学教育通信』，228，22-24ページ。

山田和人（2009a）「同志社大学のPBL プロジェクト学習とポートフォリオ（3）」、『文部科学教育通信』，229，26-28ページ。

JCER（2011）「経済100葉箱2011年度番外編⑥」。

<http://www.jcer.or.jp/report/econ100/pdf/econ100bangai20110715.pdf#search='%E6%97%A9%E6%9C%9F%E9%9B%A2%E8%81%B7%E5%95%8F%E9%A1%8C'>